

ニッポンと戦争

われわれは湾岸戦争をどう語ったのか？

田中康夫、浅田彰、柄谷行人、西部邁、いとうせいこう……。
ラジカルな平和主義から新保守主義まで、
湾岸戦争をめぐる議論を検証し、
あらゆる議論を検証し、
高度消費社会の戦争を尻拭いする！



正義の根拠はどこにあるのか？ アメリカの正義とアラブの大義

橋爪大三郎 (東京工業大学教養学部助教授)

※ 極端に言えば、一人には一億の正義がある！
だが、正義は傍観者のものではない。
実現されなければ意味がないのである。

湾岸戦争についての議論をいまもう

いちど読み返してみると、そこで語られていたのは、実は「正義」をめぐる問題であったような気がします。それはたとえば、アメリカの正義とイラクの正義、国連の正義とアラブの大義の対立として語られたわけですが、そのときの「正義」の意味が、語る人によって微妙に異なっているようにも感じられます。そこでまず、「正義」とはそもそも何なのか、なぜ複数の「正義」が同時に成立し得るのか、そのとき、正しい

「正義」と間違った「正義」はどのように見分けられるのか、今回の湾岸戦争のような国家対国家の紛争における「正義」は、私たちの個人的な人間関係における「正義」と同じものなのか、そういう基本的なところからお伺いできればと思っただけですが……。

一人には一億の「正義」がある！

橋爪 正義というものをどのように定義す

るか。これは相当難しい問題なんです。とりあえず私は、次のように考えています。まず、人がある集団をつくって大勢で生きていくとき、そこでは必然的に、やっていいこととやってはいけないことが決まってきます。それが、その集団のルールや慣習となっていくわけです。そして正義の感覚は、このルールや慣習に関係があるわけです。

たとえば、あるルールにみんなが従っていると、一人だけそのルールに従わな

者がいる。あるいは、慣習としてみんなに認められていることが、一人だけには認められない。そのようなときに、人はそれを不正義だと感じるわけです。

ところが、ここから先、議論が少し複雑になってきます。ルールはやがて、法律として明文化されていくわけですが、法律にもいい法律と、正義にもとる悪い法律がある。法律に合致していれば正義、とは簡単に言えなくなるのです。また法律のほかに道徳というものもあって、これも正義と関係があるわけですが、道徳と正義が常に一致するかというと、これもそうとも言えない。

そこで、そういう複雑な議論は飛ばして、現在正義について考えられている共通項のようなものは何かというと、一人ひとりの人間がこれが正しいと判断している感覚、それが正義だといちおうは定義できるんじゃないかと思えます。

—— そうすると、一億人の人間がいれば一億個の正義があるということですか。

橋爪 極端に言えばそういうことです。しかしもう少し正確に言うと、正義とは客観的なものでもなければ主観的なものでもない。そういう曖昧な、間主観的な場所に成り立するものだと考えることができます。

そういう正義の定義で、これまで私が見たなかでもっともすっきりしていると思っただのは、井上達夫氏のものなんです。「同じものは同じように扱う。異なったものは異なったように扱う」というものです。同じ人間なのに異なった扱いをして差別するのは不正義である。それとは逆に、たとえばハンディキャップを負っている人を健常者と同じように扱うのもまた不正義である、というわけです。

しかし、先ほどこうした正義の感覚の背景にはルールや慣習があると言いましたが、これは個人によって異なる以上に、文化的伝統によって異なっているわけです。その意味では、民族ごとに正義のあり方が違っているとも考えられ、それが今回の、アメリカの正義とアラブの大義の問題にもつな

がっているわけです。

さらに、正義の階層という問題もありま

す。個人対個人の間の正義があり、集団対集団の間の正義もある。これは主に国内法によって扱われるわけですが、それと同じように、民族対民族の間の正義、国家対国家の間の正義もあり、それが国際法によって扱われるわけです。そしてこの階層の違いによって、問題も微妙に異なるわけですが、ただし、バラバラな個人、バラバラな国家の間の秩序をどのようにつくっていくかという意味において、正義のあり方は同じだと考えていいと私は思います。

アメリカの「正義」とアラブの「大義」

—— 文化的伝統の違いとしてのアメリカの正義とアラブの大義は、具体的にはどのような説明できるのですか。

橋爪 そのことを考えるには、イスラム教の正義とキリスト教の正義を、意志論として比較してみると面白いと思うんです。結



戦争支持90%、米南部の軍事基地を訪れたジョージ・ブッシュ

論から先に言ってしまうと、神の意志を知り得るといふ立場に立てばイスラムの正義になり、神の意志は不可知だと考えればキリスト教の正義になるのです。

イスラムの神、アラーは、正義の神でもありません。したがってイスラム教徒にとっては、正義とはアラーの意志に従うことで実現されるものなのです。そして、アラーの意志によってこの世に正義を実現するための方法は、コーランに書かれており、イスラム法として体系化されているわけです。

この意味で、イスラム共同体とは、世界そのもの、イスラム法を共有する人びとの集まりであり、地球規模の国際社会、人類社会なのです。そしてこのイスラム法のもとで、たとえばユダヤ教やキリスト教の信仰の自由も認められているという具合に、正義と平等は保障されているわけです。このようにイスラム教においては、国際社会における正義が非常に明快に位置づけられています。

キリスト教においても、正義が神の意志

の実現であることに変わりはありません。

しかしキリスト教の場合、困ったことに、どうすれば地上に神の正義が実現できるのか、はつきりと述べられてはいません。いくらイエスの言葉を読み返してみても、世俗の権力、つまり当時キリスト教を弾圧し、キリスト教徒をライオンに食べさせたりしていたほど残酷なローマ帝国の権力をどのように理解していいのか、書かれてはいないわけです。使徒パウロは、けっきょくローマ帝国の権力を否定しませんでした。一種の無抵抗主義のような態度をとったことが、『聖書』に反映されているのです。

キリスト教徒が地上に正義を実現させる方法論を持っていないということは、政治権力に対するあきらめを生み、正義は地上ではなく神の国において実現されるという、二王国論へとつながっていきます。そしてキリスト教徒たちは何をしたかという、世俗の権力、つまりローマ帝国と取引きをしたわけです。

その取引きというのは、こうです。キリ

スト教徒は、ローマ帝国の権力を認め、その法律を守ることによってローマ帝国の治安維持に協力する。それと引き替えに、ローマ帝国は、キリスト教を国教とし、彼らの信仰を守る。他の宗教が入ってきたらそれを追い払うことを約束する。こういう取引きをしたせいもあって、ニーチェは、キリスト教を奴隷の宗教と批判するわけですが、ともかく、このようにして宗教的権力と世俗の権力との二元論が成立するわけです。そしてこの二元論は、当然のことながら、イスラム教の、宗教的権力がそのまま政治的権力と一致すべきだという一元論とはまったく異なるものなのです。

世界はキリスト教のために

その場合、キリスト教徒にとって、国際関係における正義というのはどのような考えられているのでしょうか。

橋爪 まず、ローマ帝国が健在だった時代は、キリスト教徒は同じひとつの世俗の法

「世界」とか「国際社会」とかは、イデオロギ

一的に中立のものではなく、キリスト教国のそうした歴史の延長線上にあるものなのですか。

橋爪 私はそう考えています。「世界」がこうなっていると、そもそもフィクションでしかないわけですから、それぞれの文化やイデオロギーによってそれぞれの世界の「解釈」があるだけなわけです。

たとえば中国の世界観というものも、一元論的で非常に明快です。世界というのは中国のことであって、中国の周辺の国々は家来でしかない。中国の都に入って皇帝の座についた者が、そのまま世界の支配者になる。したがって中国では、神の法と世俗の法が分離したり、さまざまな世俗の権力が互いに対等なものとして競合する状態が正当化されたりするということは、あり得ないわけです。このあたりはイスラム教の世界観でも同じで、イスラムの世界が複数の国に分裂しているのは、やがて強力な宗教的かつ政治的指導者が登場してイスラム共

同体を再統一するまでの過渡的状态でしかないわけです。

———そういう一元論で言えば、マルクス主義の世界観も同じじゃないんですか。

橋爪 そうですね。あれも共産主義のイデオロギーのもとに世界が統一されるまでの過渡的状态として、現在を規定するわけですから、明確な一元論です。だからアメリカやヨーロッパのようなキリスト教国から見れば、イスラムも、中国も、マルクス主義も、そして日本も、ある意味ではみんな同じに見えるわけです。

———それは、多様な国家を否定する一元論的な超国家主義の運動として、同じような脅威に感じられるということですか。

橋爪 それも含めて、自分たちの価値観とは異なる価値観で動いている国として、本能的に強い警戒感を持つわけです。それがファシズムであり、共産主義であり、イスラム原理主義であったわけですが、その意味では、日本がいつ「世界」の敵と見なされるようになってしまったとは思ってはいけません。

律(ローマ法)に従えばよかったわけですから、国際関係におけるトラブルが起るはずはなかったわけです。ところがその後、ローマ帝国は西と東に分裂し、西ローマ帝国はやがて、ゲルマンの諸部族の王たちの国に、さらに細かく分割されてしまいます。つまり、これまでは世俗の権力はローマ帝国ひとつだけだったのに、たくさん世俗の権力ができてしまったわけです。

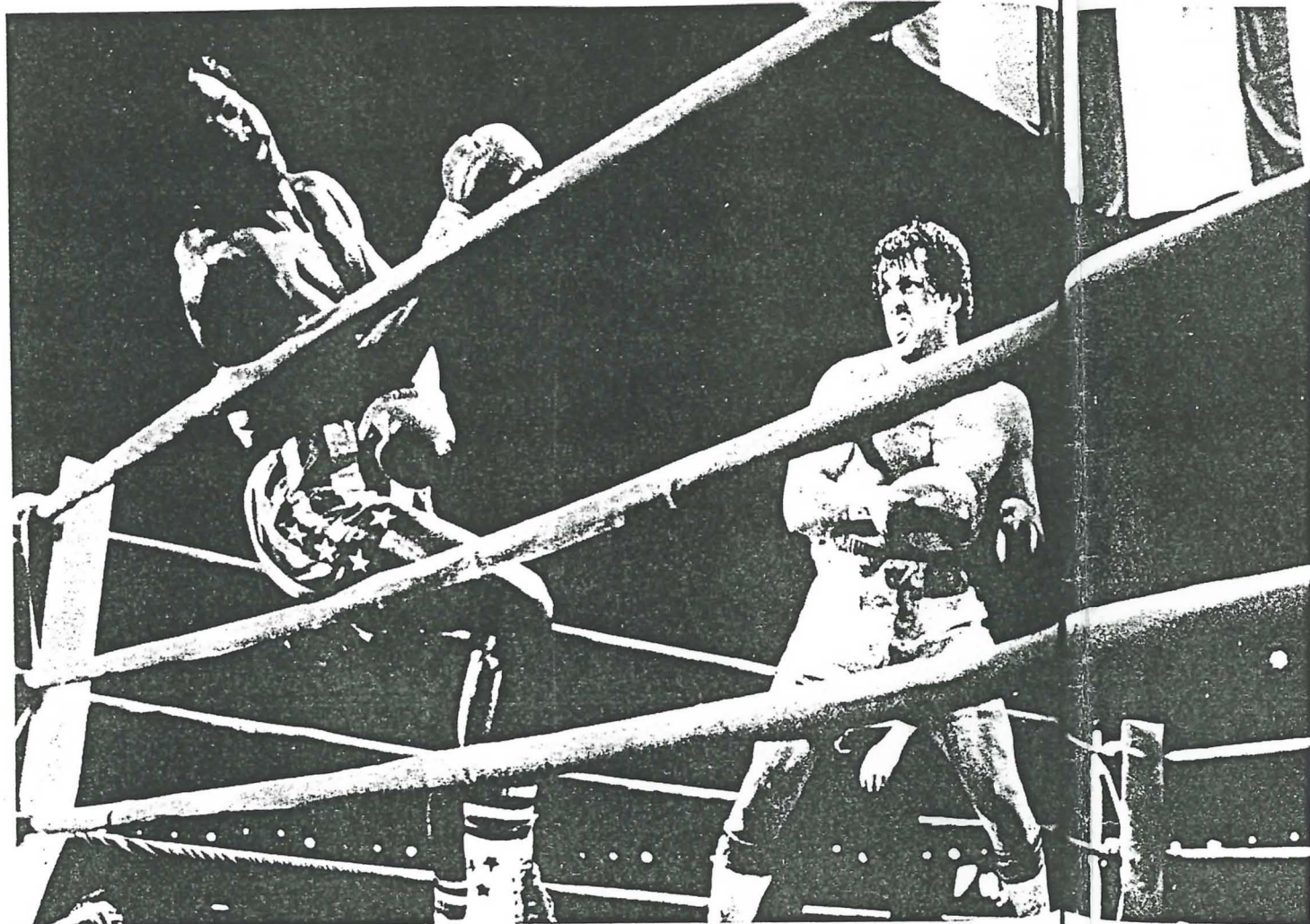
こうしてキリスト教徒は、そうした世俗の権力のうちのひとつを自らの守護者として選びたくても、それができなくなってしまいました。彼らは、ゲルマンの王たちをキリスト教徒に改宗させ、ローマ帝国の皇帝と結んだのと同じような取引きを、それぞれの国王と取り交わしたのです。その結果、教会はひとつであるにもかかわらず、複数の世俗の権力、政治的国家が競合するようになりました。これが彼らにとっての国際社会であり、国民国家のそもそものはじまりでもあるわけです。

———そうすると、現在言われている「世

強い国の「義」が正しい!

———最初に国際法と国内法では正義の階層が違うというお話がありましたが、そのもつとも大きな違いは、国内法では警察や軍隊などの「暴力」を国家が独占しているため、法の執行、法的な正義の実現が比較的容易なのに対し、国際法では、「暴力」を独占する世界政府のようなものがない現在、法的な正義がなかなか実現しない、法が守られたり守られなかったりする、ということとなんじやないかと思えます。今回のイラクに対する同情論を見ると、イラクの側に正義があるという積極的な支持はむしろ少なく、アメリカが根拠にする国際法なんて実際はみんながきちんと守っているわけでもないのに、イラクだけが怒られてかわいそうだ、という感じのものが多かったような気がするんですが。

橋爪 たしかに、国際社会におけるルールを誰がどう取り締まるかというのは、たい



多民族国家アメリカ、正義の象徴「ロッキー」

へん難しい問題です。西欧諸国は、世界政府が樹立できない以上、とりあえずいちばん強い国家が地上の正義を代行するしかないんだと考えました。その強い国家を「基軸国」と言います。かつてのイギリスや現在のアメリカがそれにあたるわけですが、そうした国にとっては、国際社会に正義を実現することこそ大国の義務であり、人類への責任であり、国家の存在理由そのものになるわけです。

基軸国となった国はまず、国際秩序を守るための強大な軍隊を擁し、それを世界各地に派遣します。そして「世界の警察」として、国際社会で不正義が行なわれていなかを監視し、同盟国の主権が脅かされるような事態になれば血を流してでもそれを守ってやる、そういう行動をとるわけですから、ポンドやドルが世界の基軸通貨

になるように、自国の経済的な枠組を調整する、大学を開放し、世界中から留学生を受け入れ、彼らに高等教育を施して祖国に送り返す、というようなことをするわけです。これは、日本には欠けている発想です。そして現実には、アメリカがそれをしなくなってしまうと、世界はバラバラになってしまいうわけです。

——その場合、基軸国、現在はアメリカですが、そのアメリカが考える国際社会における正義の基準というのは何になるんでしょうか。

橋爪 主権国家が絶対である、という考え方だと思えます。主権国家が独立した意志を持って他の国家と交渉し、同盟し、あるいは戦争するのが「国際社会」だということになれば、そこに当然、ルールや慣習というものが生まれてくる。そのルールや

慣習がやがて国際法としてまとめられていき、国際法に違反する行為が「不正義」だとされるようになっていくわけです。そしてそうした国際法の根幹を考えていくと、それは「国家主権を守る」ということになるんです。

主権というのはもともとは神に属するものであり、中世においては教会の許しを得て、王はそれぞれの土地を治めていたわけです。それがやがて、王権が教会の権威から切れて、宗教的な権威と世俗の権力を一身に体現するようになる。それぞれの王が主権を持つ、絶対主義の誕生です。そしてこの主権が、フランス革命や独立戦争などの国民戦争を経て国民の手に渡ったとき、もはやこの国家主権を超えるいかなる原理もなくなったわけです。

このように、国民国家というのは、キリスト教徒が教会の支配や王権の支配を離れて自ら国家をつくり、互いに戦争をすることによって生まれたものなわけです。そしてその戦争というのは、国民の意志による

ものである以上誰にも止められないし、仲裁者もいませんから、それ以前の戦争に比べてはるかに苛酷で熾烈なものにならざるを得ない。こうした残酷な近代戦を経て、どのようなルールに則って戦争をするかという戦時国際法がつけられていったわけですから。

したがって、国家主権というのはもちろんひとつのフィクションなわけですが、このフィクションを否定してしまうと、アメリカやイギリスやフランスが国家であることアイデンティティがなくなってしまう。だから、彼らにとって国家主権は神聖不可侵なんです。

——それは、キリスト教的な意味での神聖不可侵ということなのでしょうか。

橋爪 そうですね。基軸国というのは、宗教的信念に基づいて国家主権を守ろうとする、と言ってもいいかもしれません。もつとはっきり言ってしまうえば、現在の国際正義というのはキリスト教徒の宗教的正義と密接な関係があり、その正義を代行するア

アメリカは同時に、世界を解釈する者でもあるわけです。

——その宗教的正義を、今回はイラクが冒したということですか。

橋爪 はい。そう言ったってかまいません。

アラブの「大義」は本当にいいのか？



——今回の湾岸戦争では、いままでお話しただいたキリスト教的な国際正義とイスラム教の正義、いわゆるアラブの大義の関係が問題になったと思うんです。そこで、イラク擁護の主張というのを見ると、大きく分けてふたつの言い方があったように思えます。そのひとつは、イスラム教においては国家主権なども認められていないのだから、イラクがイスラム圏以外の国を侵略したのならいざしらず、イスラムのなかでの争いに国家主権などという正義の基準を持ち出すのはそもそもおかしいというものであったように思います。こうした主張については、どのようにお考えでしょう

か。

橋爪 私はまず、正義とは傍観者の語るべきものではない、と考えています。正義というのは、当事者が行動する基準であり、それによって秩序をつくりあげていく指針であるわけですね。その意味で、たいへん苛酷なものでもある。つまり、正義は実現されなければ意味がないし、実現不可能な正義についていくら語ったところで仕方がないのです。

非常に残念なことに、アラブ世界は現在、世界をリードしているのではないわけですね。世界の石油の六割以上を手にかけているといっても、彼らの地位は、国際社会の現状のなかでは、マイナーなものでしかありません。

——それは、アラブの正義は実現不可能だから意味がないということですか。

橋爪 そうではなくて、私たち日本人が国際社会における正義について考える場合、まず、現実の世界において機能しているのはアメリカの正義以外にないということ

認めるべきだということなんです。日本の

国家も、アラブの国家も、国家主権の考え方のうえに成り立っている。イスラム教の正義とキリスト教の正義は、文化としては対等ですが、現実政治のうえではまったく対等ではないわけですね。それにもかかわらず、両者をまるで対等であるかのように見なし、それぞれの正義を批評し、裁定するようなことをいくら議論しても意味がない、ということですね。

さらに、アラブの大義と国連の正義があるとして、私たち日本人は、アラブの大義にはコミットできないし、するべきでもないんです。それに対して、国連の正義にはコミットできるし、現にしている。そうであるならば、そもそも日本人が自分の国の主権を侵されたくないと思うのなら、アメリカの正義を研究し、現在の国際秩序に日本が当事者としてどのように関わっているのかを考えるのが現実的な議論だと、私は思います。

資料▼「国際社会の正義」を知識人はどのように語ったか？

「今回の湾岸戦争は、日本国憲法の用語でいえば、専制と隷従、圧迫と偏狂を白昼公然と輸出したサダム・フセインの行為に対して、これを明らかに道理と正義に反す

る行為と認め、決して黙認できないとする国連安保理事会の決議に基づいて行われた行為である。私は、武力の行使はやむをえないことだと思ふ。」

これまた当然のことで、それが湾岸戦争の正当性を阻害することにはならない。

「すべての国家は利益に基づいて行動している。それは何らとがめられることでもなければ、何ら不当なことでもない。その利益確保の手段を国際正義との協調のなかで発動するかしないかの違いである。サダム・フセインは国際正義を踏みにして軍事力を発動したし、ブッシュは協調のなかで軍事力を発動したということである。フセインもブッシュも利益を背中に背負って戦っている。

現実世界には「100%の正義」とか「100%の悪」ということはなかなかないが、「90%ないし80%の正義」と、「90%ないし80%の悪」とが対決していけば、これはおのずと判断は明らかになるべきはずである。」

「つまり、もともと戦争そのものが、非人道的かつ非論理なものなのです。いったんはじまった以上、勝つためには何だかやってのけるのが戦争です。口にしたくもないことですが、戦時中に日本の大学でアメリカ兵捕虜を生体解剖しましたが、これは敵を材料として医学研究を向上させ、味方の命を救いたいという戦時下の正義によるものです。」

（中略）
イラクを決して支持するわけではありませんが、私にはパレスチナ問題をリンクさせるイラクの言い分も一理あるように思います。中東周辺の歴史や風土を無視して、国連の正義のもとに近代理論と近代兵器を持ち込むのは、一種の侵略というべきでしょう。」

「武力により地中海のキプロス島を侵略し、島の北方をここ二十年近く占領し続けているトルコも、国際秩序なるものを破った悪者であるから懲罰される筈だが、国連の決議を尻目に、アメリカは常に見ぬ振りをして沈黙を守ってきた。共産圏に対する防波堤として重要視され

てきたトルコに対し、島の一つや二つ占領したくらいで文句を言うような馬鹿なアメリカではない。NATO（北大西洋条約機構）の一員として、トルコは今回アメリカに忠誠を誓い、その御褒美として何億ドルもの援助金をもらっている。

天谷直弘
「湾岸戦争をどうみるか」『ダチエウ』(四回)11
Voice 九一年三月号

伊藤憲一
「湾岸戦争の正当性と教訓」
「正論」九一年三月号

上坂冬子
「湾岸戦争をどうみるか」疑わしい国連の「正義」
Voice 九一年三月号

松原久子
「アメリカは戦争を望んでいた」
「文藝春秋」九一年四月号



アラブの大義、リンケージを打ち出したフセイン支持のデモを行なうヨルダン市民

国家主権を放棄させられているわけですから、先ほどから言っているヨーロッパ的な正義の基準に照らしても、決して正当化できないものであることは、はっきりしています。そのことを前提といたうえて議論を進めると、その国境をイギリスが決めたという歴史的経緯はあるにしても、イラクという国も現在は、国家主権を主張する国民国家の体裁をとっているわけです。国家主権というものは、相互承認のルールによって成立するものですから、イラクも、クウェートを含む他の国々の主権を認めることによって、自らの主権を主張している。そうである以上、クウェートの主権を一方的に否定するようなことを、国際社会は認めてはならないわけです。パックス・ブリタニカの時代のすべての矛盾を解決することなど、簡単にできるはずないし、もしそれをやろうとするならば世界はバラバラになってしまう、それが現実なんです。

———ということは、植民地時代に不正義が行なわれたとしても、被植民地国はその

国際社会のルールを破った侵略者サダム・フセインを懲らしめ、正義を打ち立てるといふのは大義名分に過ぎ

ない。」

「ここはアメリカに加担するよりないのである。ノーと言いたき事も山とあれど、日露戦争の仇討ちとばかりにカラフトから北海道、ひいては東北へと侵攻し、戦後は朝鮮半島同様に日本の二分割を画策した北極熊のソ連を結果として封じてくれたのはアメリカであり、朝鮮戦争でもうけさせてくれたのもアメリカである。それがアメリカの政策であったにせよ、その策に乗じて戦後四十数年、何もしなかったお返しとして、この

ところはアメリカに金を出すのが、もっとも現実的な策である。どちらに大義があるかそれによって態度を決めようなど論外である。そもそも正義の戦争などかつてこの世にあったたけなしと大昔に孟子は喝破している。正義と大義は国の数だけ、イデオロギーの数だけあると相場は極まっているのである。そこが解っていない。」

植民地の矛盾と中東の秩序

———イラク擁護のもうひとつの言い方に、イラクとクウェートの国境はもともとイギリスが勝手に決めたものであって、そんなものに正当性などないんだという言い方もあったように思います。これはつまり、アメリカやイギリスは植民地主義の時代のことを清算しないままに、自分たちの都合のいい正義をアラブに押しつけているんじゃないかという主張だと思えますが。

橋爪 植民地というのは、宗主国によって

石堂淑朗
「日本人の反日感情—おそまし
や牝鶏農して国滅ぶの國」
『新潮45』九一年三月号

橋爪 そうなんです。だからアメリカは苛立つわけです。たとえば、西ヨーロッパは国民国家だとしても、東ヨーロッパになると怪しくなる。それがソビエトになるともっと怪しくなる。アジアを見たって、ギリギリ日本が合格かどうかで、それ以外には国民国家なんてどこにもない。アラブやアフリカにはもちろんひとつもないわけです。

だからこそ、ホメイニのイランを打倒するためにフセインと組み、そのフセインを倒すためにサウジアラビアのような王制の国と組むという、矛盾した行動をアメリカはとらざるを得ないということですか。橋爪 そうです。アメリカとしては本当は自分と同じ価値観を共有する国と同盟を結びたいわけですが、実際にはそのような国がほとんどない以上、どちらか害の少ないほうと同盟せざるを得ない。だから、国民

国家の原理を否定する超国家主義のイスラム原理主義に対しては、フセインのような独裁者とも手を結ぶし、その独裁者を牽制するためには、王制の国とも同盟を結ぶ。

アメリカとしては、中東にホメイニでもなければフセインでもない国民国家の秩序が生まれる見込みなどない以上、他に方法はないわけです。

国際関係のような複雑な問題で、正義が一案に実現するなどということはあり得ません。ひとつずつ問題を解決していくしかないわけですが、モグラ叩きのようなことをずっと続けるはめになって、アメリカはますます苛立つわけです。

果たして世界は平和になるのか？

——それは最後の質問なんですけど、そうしたアメリカの正義、キリスト教国の枠組のなかの世界秩序というものを追求していくって、果たして世界は平和になるんでしょうか。

橋爪 そこが非常に大きな矛盾なんです。それはどういふことかと言うと、国家主権を神聖不可侵なものとすると、当然それは、現在の国境を固定化する力として働くわけ

です。しかし現実の社会・経済の実態というのは動いているわけですから、その固定化された国境がずっと合理的であり続ける保証などどこにもないんです。したがって、現在のシステムだと、領土は戦争によって変更するしか、現実的には方法がない。となると、国家主権を神聖不可侵なものにしたことよって、逆に戦争の危険を大きくしているとも言えるわけです。

もともと、すべての民族は、入り混じって平和に暮らすための知恵を持っていたんです。それが、国民国家のようなものをつくったために、互いを排斥して、苛酷な殲滅戦のようなことをやらざるを得なくなっただけです。

——今回の湾岸戦争も、国家を前提として起こった戦争ですよ。それをアメリカは、国家の原理によって正そうとした、ということなんですか。

橋爪 ええ。毒を以て毒を制す、みたいなものですね。

——すると、国家をつくったことに、人

類の原罪のようなものがあるということなんじゃないですか。

橋爪 と言うか、人間がその土地にしばらくつけられて生きている時代には、国家など必要なかったわけです。しかし産業資本主義が成立して人が自由に移動するようになると、国家という枠をつくってそれを制限しなければならなくなった。アメリカという国は、あの広大な国土にあれだけわずか

な数の人間しか住んでいないから豊かなんです。日本にいくら就職機会があるからといって、外国から無制限に人が移住してきては困るわけです。つまり、先に国民国家をつくった国はずっと豊かなままで、残り

の貧乏人は貧乏人同士で国をつくれ、自分たちの国には入れてやらないよ、という苛酷な論理が、国家主権の尊重という思想の背後にあるわけです。



世界を解釈するもの戦争3、ベトナム戦争

そして、最初に言ったように、ルールや慣習が正義の基準だということであれば、過去の不平等、つまり先進国の既得権もまた、正義のひとつだと見なし得ることになってしまうんです。

——それと同じように、第三世界の、自分たちだけがアメリカや日本のように豊かになりたいという要求もまた、正義なわけですよ。

橋爪 ええ。ですから、さまざまな正義を並べて正義の品評会のようなことをやってもあまり意味がないわけです。私たち日本人が国際社会の正義についていま考えなくてはならないことは、アメリカのヘゲモニーを認めたくなくてそれにどのよう貢献するか、あるいはアメリカのヘゲモニーを認めないならば、それに代わる正義の枠組をどのようにつくるのかを提案していく、そのようなものでなければならぬと思います。